

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350788

研究課題名(和文) タレント発掘事業プログラムに参加したアスリートの適応過程に関する研究

研究課題名(英文) Research on adaptation process of athletes who participated in TID program

研究代表者

杉山 卓也 (Sugiyama, Takuya)

静岡大学・教育学部・講師

研究者番号：90636359

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：JSCの了解のもと、福岡県タレント発掘事業プログラム修了生の種目転向に焦点を当てて調査を行った。種目転向がうまくいったケースの対象者(国際大会出場経験あり)6名と、種目転向してはみたもののその競技が続けられなかった者2名の合計8名の修了生の新種目への適応過程についてインタビューを行った。

その結果、種目転向したアスリートの適応過程の理解、心理的介入の必要性・タイミングについても重要な示唆が得られた。また、福岡県タレント発掘・育成事業関係者に問題提起と新たな提案を行った。

研究成果の概要(英文)：Under the agreement of JSC, we conducted a survey focusing on the conversion of sports of Fukuoka TID program graduates. 6 persons in the case where the conversion of sports was successful (with experience of participating in the international convention) and 2 persons who converted the sports but could not continue were interviewed about the adaptation process.

As a result, the adaptation process of the athlete who converted the sports was deeply understood and significant suggestions of the necessity and timing of the psychological intervention were obtained. In addition, we raised questions and made new proposals to Fukuoka TID program concerned parties.

研究分野：体育・スポーツ心理学

キーワード：種目転向 タレント発掘・育成 TID 適応過程 葛藤

1. 研究開始当初の背景

2020年東京オリンピックの開催が先頃決定した。日本においては、もとよりオリンピックへの関心が諸外国以上に高く、今回の決定でさらに熱を帯びてくるであろう。地元開催ということもあり、地の利を生かし、国民を熱狂させるような好成績が期待される。しかしながら、各国はオリンピック選手の強化に余念がない。オリンピックや国際大会などトップレベルの大会で活躍する選手を輩出するためには、ジュニア期からの育成を図ることが必要であり、日本を含め、全世界が若いスポーツタレントを発掘し強化に努めている。

そのため、ゴールデンエイジ(11歳以下)と呼ばれる年代の子どもたち一人ひとりの意欲を喚起し、適性の考慮や発育・発達段階を踏まえた最高の育成プログラムを実施することが望まれる。それとともに、社会適応能力、人間性、国際性などを備え持つスポーツ選手を育成し、オリンピックや2010年からスタートしたユースオリンピックをはじめとする国際大会や全国トップレベルの大会で活躍できる高い競技力を有するジュニア選手を育成することが望まれる。

福岡県は、2004年よりスポーツの優秀な能力を持つ子ども達を発掘・育成する我が国初の事業を開始している。福岡県がこの取り組みを始めてから、和歌山、岡山、北海道美深町、山口、岩手、秋田、山形、東京、等々約25の都道府県および市町村が小学生、中学生を対象とした同事業を開始している(山下ら、2013)。日本オリンピック委員会(JOC)、国立スポーツ科学センター(JISS)もこの事業に関与し、情報提供や人材の派遣も行っている。この事業は、単にスポーツの優秀な子どもを早期に見つけるだけでなく、その子どもの能力を大きく育むという目的がある。

小中学生に向けて、自分の能力に応じた適性の高い競技を実施すれば、今以上に活躍できる可能性があるとしており、実際に、福岡県タレント発掘事業において、平成24年度には、フェンシング、セーリング、射撃、陸上、スピードスケートショートトラックにおいて、ユース年代ではあるものの、国際大会への出場を果たしており、一定の成果を上げている。

2. 研究の目的

各国はオリンピックなどの国際舞台で成果を上げるために、将来、特定のスポーツで活躍するアスリートを早期に発掘し、育成しようとする試みを推進している。我が国においても、2004年に初となる福岡県タレント発掘事業がスタートしている。本研究においては、その福岡県が行っているタレント発掘プログラムに参加したアスリートへのインタビューを中心に、アスリートの適応過程を詳細に分析し、またプログラムの評価を行っていく。主な目的は2つである。1つは、タレ

ント発掘事業プログラムに参加したアスリートの新種目への適応過程についてインタビューを通して明らかにすること。もう1つは、前述のアスリートへの新種目への適応過程に関するインタビューから得られた知見をもとに、タレント発掘事業プログラム自体の評価、改善プログラムの提示を行うことである。

3. 研究の方法

はじめに、福岡県タレント発掘育成事業等を所管する日本スポーツ振興センター(JSC)に調査の依頼を行った。そこでバラエティーに富んだ各地域のタレント発掘育成事業の視察・聞き取り調査を行った。その他にもJSCが所管はしていないが、独自の取り組みを行っている団体等にも視察・聞き取り調査を行った。

次にインタビュー対象の候補者の条件を共同研究者と話し合い、福岡県タレント発掘育成事業関係者に条件に該当するアスリートの選定を依頼した。選定された種目転向がうまくいったケースの対象者(国際大会出場経験あり)6名と、種目転向してはみたもののその競技が続けられなかった者2名の合計8名の修了生に個別に連絡を取り、調査協力への了解を得た。そして、新種目への適応過程についてのインタビューを行った。分析については、インタビューデータを詳細に記述し、理解を深めたうえで、種目転向に関わる記述とタレント発掘育成プログラムに関する記述を分け、分析・整理を行った。種目転向に関わる記述の中で、種目に関する感情等が現れている部分を抽出し、見出しを付け、カテゴリー化していく。タレント発掘育成プログラムに関する記述についても、良かった点や課題と思われる部分を抽出し、見出しを付け、カテゴリー化していく。その際に、可能な限り主観を排除するため、共同研究者とともにトライアングレーションを確保した上で分析を進めていく。

4. 研究成果

本研究の主な目的は2つであった。1つは、タレント発掘事業プログラムに参加したアスリートの新種目への適応過程についてインタビューを通して明らかにすること。もう1つは、前述のアスリートへの新種目への適応過程に関するインタビューから得られた知見を柱に、タレント発掘事業プログラム自体の評価を行うことであった。

前者については、その結果の一部に関して、「種目転向の際の選手の気持ちに着目して福岡県タレント発掘事業出身選手を対象として」をテーマに、九州スポーツ心理学会にて発表を行った。種目転向したアスリートの適応過程が詳細に記述された。

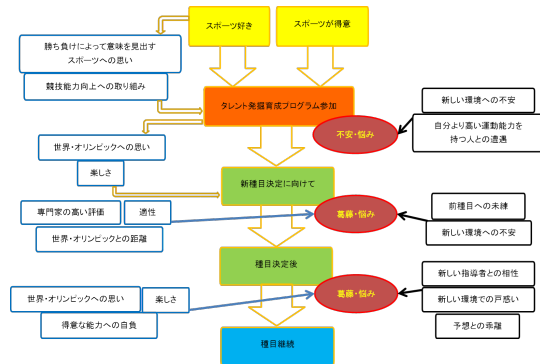
対象者は「スポーツすること自体結構好きで、運動神経にも小学校の中とかでは自信があったんで、いろいろやりたいな」というよ

うに、《スポーツが好き》・《得意》であり、また「実際オリンピックにも小学校ぐらいから興味があって」という《オリンピックへの憧れ》から、福岡県タレント発掘事業に応募し、選考の結果、プログラムに参加することとなった。

プログラムに参加する中で「私、競泳で、基本陸の運動全然してなくて、他はみんなバスケットとかバレーとか陸上の子たちで、基本私よりみんなできる子が多くて、自分の周りに今まで自分より運動できる子がいなかったんで、小学校とかの小ささだと、なんで、衝撃でした。みんななんでこんなにできるんだろうみたいな、すごい悔しいときが多かったです。他の子よりできないっていうのが、女の子で」という発言の一方、「唯一水球を、プログラムがあって、そんなときは輝いてました」「一番楽しかったのはパドミントンが結構、意外と得意で他の子とかにも勝ったりして」といった《勝敗へのこだわり》ものぞかせていた。

様々な競技種目の体験をし、プログラム修了となる中学3年時には種目を選択しなければならない。「難しすぎて、こんな頭使うスポーツ無理だなと思って」「難しく、自分には向いてないって思いました」といった不安を示す発言が見られたが、「自分的にはもう全くできないと思ってたんですけど、初めての割には結構うまくできてたらしくて、この子を育てたい的な感じで」《関係者から評価》されていた。「気持ちはすごい水球したかったんですけど、水球だとオリンピックの国枠が取れないっていうので、女子の水球が弱いから」といった《オリンピックへの距離感》を種目選択の大きな判断材料であることを伺わせた。「(競泳をやめるっていうことに関してはどうでした?) すごい泣きました。悲しくて」「嫌だなって思いながら。でも、競泳のきつい練習をもうしなくていいんだっていう気持ちもあり、すごい競泳が好きだったんで」「競泳じゃ無理だなっていうのは自分でも思ってたんで、体格的にも、それで」「競泳か水球か[当該種目1]で、どうしようって悩んでて」「号泣ミーティングを何回もして、親も含めた3者面談とかもあって、そんなときにも号泣して」などの《悩み・葛藤》を超え、「でも、自分はオリンピック行きたいっていう思いがあったんで」「本当に最終的にはそのT先生の、本当に自分がオリンピックに行きたいなら[当該種目1]しかないだろうっていうので」結局、新しい種目に転向することを決断した。

その後「楽しさはいろいろあったんですけど、なんか合わないなってずっと思いながらやって」「やっぱ2人っていうのが多分・・・(略)・・・うまくいかず、成績もあんま良くなく」「監督とあんまり合わなくて、コーチとはすごい合ったんですけど」などの《悩み・葛藤》の末、大学入学後にまた種目転向を行った。



図．対象アスリートの新種目への適応過程

「常に楽しいっていうのがあって、その中でも強化体制みたいなのがしっかりしてなくて、[当該種目1]と比べて、[当該種目1]だと毎日コーチがいて・・・(略)・・・大学に入ったらコーチもなくて、基本学生だけで練習みたいな環境なんですけど。これで本当に世界で勝てるのかっていうのは、今でもあるんですけど」「今思えば、水球してたら東京オリンピック出てたなって思います」と《他種目への未練》を多少残しつつも、「[当該種目2]はそれと比べたら結構弱いんで、大丈夫かなっていうのもあったんですけど、でも[当該種目2]に関しては楽しいっていうのがあって、自分の気持ち的にも」「結局は楽しくないとなんも続けれないし」として、2度の種目転向を経て、《オリンピックへの距離感》《当該種目の楽しさ》に大きな価値を見出し、適応していった姿が見取れた。図にはその過程がまとめられている。

また、プログラム参加当初、種目選択時、種目選択後に様々な《悩み・葛藤》が挙げられており、心理面のサポートの必要可能性が伺い取れ、心理的介入の必要性・タイミングについても重要な示唆が得られた。種目転向したアスリートの適応過程については、学術誌への投稿に向け、さらに分析を続け、進めていく所存である。

後者についても、福岡県タレント発掘育成事業関係者に対し調査結果の報告を行った。

特に当該事業のよかった点として挙げられたのは、

- レベルの高い参加者たちと切磋琢磨できる
 - いろんな種目を経験できる
 - 知的プログラムやトップ選手の講話など普通の小・中学生ではできない経験ができる
 - 科学的な根拠で種目を決められる
- などであった。

一方、課題として挙げられたことはいくつもあったが、そのほとんどは既に現在のプログラムでは改善されているものであった。例えば、プログラムへ出す側のクラブの指導者への説明周知、修了生へのプログラムなどである。その他に、

- 転向先にマイナー種目が多い故に、環境面で整備されていないことがあるので、送り込む先の情報の提供
 - 修了後のサポートの充実
 - 参加しやすい修了生プログラムの実施時期の検討
 - 参加回数の不足（週1回じゃ足りない）
 - 指導者へのプログラムの充実
 - 知的プログラムの改善（内容がかぶっていた？趣旨説明をしっかりと）
 - 性格診断などの導入などの発言が見られた。
- また、調査結果を概観すると、
- 特定の人物への負担（種目転向決定に当たっての相談）
 - 参加当初の参加者への心理的サポート
 - 種目転向後の参加者への心理的サポートが挙げられた。

また、共同研究者との予定が合わなかった関係で、分析のミーティングがなかなか行えず、その分の時間・予算を、海外でのエリート発掘・育成の成功事例についてのインタビューにあて、実行した。事前の調査で調査に適した対象をリストアップし、事業者の協力を得て、アポイントメントを取ることができたイングランドサッカー協会スカウト部門責任者、元 UK SPORT 関係者、ウェストハム Utd（サッカーイングランドプレミアリーグ）アカデミー責任者、アンデルレヒト（サッカーベルギー1部リーグ）アカデミー責任者に対し、具体的なセレクション方法や基準等について主に心理的な側面からインタビュー調査を行った。その結果、概ね日本でも既に言われたり行われていることも多かったが、共通して、レジリエンスやコミットメントが重要であることが確認された。また、元 UK SPORT 関係者への調査からは、オリンピックを目指すうえで4年と8年のサイクルで人材を追っていくことが成功の秘訣ではないかとの知見を得た。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

杉山卓也・北村勝朗・磯貝浩久 種目転向の際の選手の気持ちに着目して 福岡県タレント発掘事業出身選手を対象として 九州スポーツ心理学会 2017年3月5日@アクロス福岡大会議室 7F (福岡県福岡市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉山 卓也 (SUGIYAMA, Takuya)
静岡大学・教育学部・講師
研究者番号：90636359

(2) 研究分担者

北村 勝朗 (KITAMURA, Katsurou)
東北大学・教育情報学研究部・教授
研究者番号：50195286

(3) 研究分担者

磯貝 浩久 (ISOGAI, Hirohisa)
九州工業大学・教養教育院・准教授
研究者番号：70233055